

不快指数

爽やか指数

関東地方から西では梅雨に入り暑く長い夏を迎えた。覚悟はしていたとはいえ通勤途上や仕事場での蒸し暑さは辛く不快指数の数字が気になり始めている。この不快指数、読んで字のごとく体感指数で単に気温と湿度を組み込んだ蒸し暑さの度合い「不快さ」を表したもので気温三十℃、湿度七〇％で八二となる。七〇を超すと不快を感じる人が出始め、七五で半分の人が、八五では全員が不快を感じるという。

不快さの指数とは蒸し暑さに追い討ちをかけられるようでなんとも言葉の響きが悪い。そのうえ日本人好みの風が入っておらず片手落ちの感が免れない。言葉の裏返しをして風を入れた「爽やか度」にしてはどうだろうかと思いをはせてみた。

が、風の爽やかさを数字に表すにはどうしたらよいかとの考えの緒のところであつまずいてしまった。風には顔があり個性がある。朝に夕に昼の炎天下というように時々刻々と顔を変えながら、路地裏の打ち水の上に吹

く風と、ビルの谷間を吹き抜ける灼熱の風をまとめるのは至難の業となる。

またソヨソヨと頬をなでる風に爽やかさを感じるが、同じ風でも人工的な風と自然の風の心地の良さには何か微妙に違う。人の快適さる関連しているとされる「F（エフ）分の一のゆらぎ」が人の身体の奥深いところのリズムとも一致している時に爽やかさを強く感じる。心臓の鼓動にも実際計ってみるとプラスマイナス一割くらいの誤差で速くなったり遅くなったりしている。その情報を伝える神経や脳波など人そのものも持つリズムがf分の一のゆらぎを持っている。

同じ風の強さでもこのくらい感じ方が違っているのでは爽やかさを数字にするにはやはり無理なのだろう。結局、不快指数を百から差し引いた数字に風情、風流を加えた爽やか度とする以上のものはなさそうだ。

気象庁・村松照男